Steel La

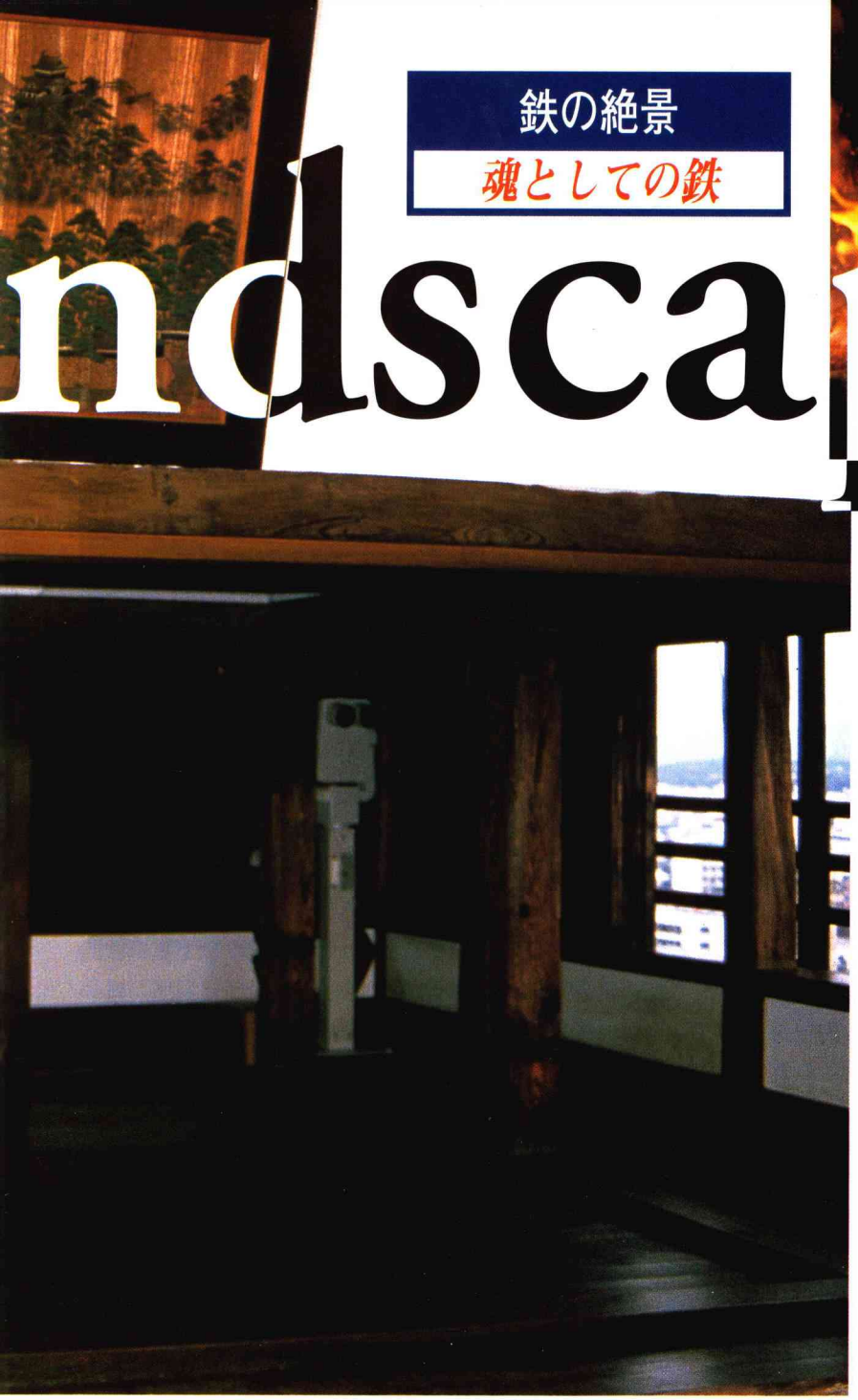
神話のふるさと、
島根県地方は、
かつて、わが国で
もっとも製鉄の盛んな
地域として知られていた。
ここは古来からの製鉄法
「たたら製鉄」のふるさとでもある。
島根の絶景を通して、
“和鉄文化”の今を訪ねる。

鉄の絶景

魂としての鉄

島根

ndscape.



水の都を一望に見わたす松江城。

18万6,000石の城下町、松江市は、市内に約500もの橋が架かる、水の都として知られている。市中を縦横に流れる川、そして宍道湖に暮れていく穏やかな夕陽を見下ろすのは、松江のシンボルともいえる松江城だ。

あの関ヶ原の戦いで名をあげ、大守としてこの地に入った堀尾吉晴が築城し、慶長16年（1611年）に完成している。設計にあたったのは「太閤記」の作者として知られ、吉晴とも親交のあった小瀬甫庵（おぜほあん）であったと伝えらていれる。

黒く厚い雨覆板で覆われた外装。実戦本位に造られた構造。外観の優美さをまったく無視した、質実剛健の構えが特色となっており、姫路の白鷺城に対して、千鳥城の名がある。

明治時代に入り、数多くの城閣が取り壊しの難を受けたが、幸いにも、この松江城は天守閣のみ、それを免れている。明治８年に米100俵（約180円）相当で払い下げられかけたのを、当時の豪農らが奔走して買い戻し、現在の状態でとどめられるようになった。昭和25年より５年がかりで修復工事が行なわれたものの、桃山・江戸時代初期の面影を残す城として、重要文化財に指定されている。

築城当時の面影は、城内の展示物にも見て取ることができる。武具、そして刀剣……。「武士の魂」として、かつて用いられた道具を通して、もうひとつ島根の側面を見出だすことができる。

神が宿る、たたら製鉄の炎。

文明開化によって日本の製鉄は大きな様替わりを見せた。西洋の製鉄技術の導入である。工業化の発展を目指し、これによって大量の鋼鉄が作り出されることとなった。それまで日本の製鉄を支えてきたのは「たたら製鉄」と呼ばれる方法であり、すぐれた鋼鉄を製造する技術として、島根は出雲を中心とする中国山地一帯で生産が行なわれていた。それが洋鉄の台頭により、一旦、その長い歴史を閉じることとなる。

「たたら」とは、簡単にいえば砂鉄を溶解して製錬を行なう施設の総称であり、そこで行なわれる製鉄をたたら製鉄とい

15

冬期、1月から2月にかけてが、たたら製鉄のシーズン。
操業がはじまると、風を送る鞴(ふいご)の音で空間は満たされていく。
荘厳に燃え盛る炎には火の神「金屋子(かなやこ)様」が宿るとされ、たたら製鉄には火の神に対する信仰という側面もあった。
写真は、操業の後、炉をとり壊すところ。

う。砂鉄は花崗岩や安山岩を母岩にしているため日本各地で見られるが、なかでも中国山地は花崗岩の風化がもっとも進んでいる地域であり、そのため、豊富で良質な砂鉄に恵まれていた。また、砂鉄のほかに、燃料となる木炭や運送の便などの条件も整っていた。

ちなみに、この地方で唄われる「安来節」は、どじょうすくいで知られるが、その踊りは砂鉄を採取する姿を真似たものだといわれる。

西洋の技術で製造された洋鉄に対して、たたら製鉄によるものを和鉄という。和鉄は洋鉄と比較して、リンやイオウが少なく純度が高いため、おもに鉄製工芸品の機能を高めることに貢献してきた。とくに武具や刀剣には、たたら製鉄を通して作られる、もっとも良質な「玉鋼(たまはがね)」が用いられており、折れにくく、曲りにくく、錆びにくい、最高級の鋼として重宝されていた。

刀剣は今もなお日本が世界に誇る美術品のひとつだ。愛好家も多い。たたら製鉄は、昭和初期に一度復活し、そこで生産された鋼が払底した後、昭和52年に国庫補助事業として再開されることとなった。現在、(財) 日本美術刀剣保存協会が、日立金属株式会社の協力によって、島根県仁多郡横田町にたたらを開設している。これを「日刀保(にっとうほ)たたら」という。

日刀保たたらでは、伝統的なたたら製鉄の方法を踏襲し、毎年冬期に製鉄を行なっている。たたら製鉄は、粘土で築いた炉に砂鉄と木炭を装入し、送風しながら木炭をたいて砂鉄を溶解していく。取り出すときは炉もいっしょに壊す。約7日間を要する作業工程のうち、火入れから送風停止までの三昼夜は「操業」と呼ばれ、もっとも重要な工程である。この間、操業の長である「村下」は炉を監視しつづけ、かつては一睡もせずにこの作業にあたったという。一回の操業に用いられる砂鉄は約10トン。ここで生産された数トンの玉鋼が、全国の刀匠、約250人に分与されていく。

古くてすぐれたものは数々あるが、このたたら製鉄にもそれがいえそうだ。かつて武士の魂であり、今では類なき美術品として愛されている刀剣がその輝きを放つことができるのも、たたら製鉄が今もなお維持されつづけているからこそなのだ。

●取材協力：財団法人日本美術刀剣保存協会
●写真提供、撮影（たたら）：鈴木卓夫氏
●参考文献：「作刀の伝統技法」鈴木卓夫氏著、他

16